

夏目漱石の作品における都市と建築空間

—その1 建築用語の頻度と意識時間みる漱石の空間—

正会員○ 古市 俊郎*¹
同 若山 滋 *²
同 渡辺 孝一*³
同 夏目 欣昇*¹

【序】 大政奉還の年に生まれた夏目漱石は、西洋諸国に互して国際的に認められる国家を形成するという基本理念のもとに西洋文明を導入した明治から大正にかけての日本を生きた、代表的な文学者であり、知識人である。この時代の日本は文化構造が一転し、東京をはじめとする都市も大きく変貌を遂げ、以後の日本の都市・建築を方向付けた時期であり、漱石の作品にはその時代の新しい文化と古い文化の相克が強く現れている。

本研究は、夏目漱石の代表的な12作品をとりあげ、そこに現れる都市・建築空間を分析することによって、漱石という類稀な才能の持ち主の眼を通して、その空間の時代的意味構造を探ることを目的とする。

【研究対象】 本研究における研究対象は夏目漱石の代表的小説とされる『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『草枕』『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『こころ』『道草』『明暗』（岩波書店 漱石文学作品集）の12作品である。これらは漱石の執筆時期全般に渡っている。

【研究方法】 1) 作品中に出現する建築・都市空間に関する用語を建築用語として、抽出し、分類（建物、部屋、部位、建具・部材、家具、庭、都市施設、地名、国名、交通機関、その他）し、その頻度と傾向について考察する。

2) 物語が進行する舞台空間について、小説の叙述量つまり文字数を作者及び読者の意識時間として集計し、舞台推移と舞台別の意識時間の合計の特徴について考察する。

【建築用語の頻度と傾向】 建築用語の分類別の頻度

（図-1、表-1）をみると、12作品全体合計では〔建物〕〔部屋〕〔地名〕〔家具〕〔部位〕の頻度が高く、種類も多い。各作品でも同様の傾向がみられるが、その中でも特に「家」「室」「東京」「宅」「学校」「座敷」の頻度が高い。〔建物〕では「学校」の他に「大学」「高等学校」「図書館」など様々な学校関係の用語が出現しているのに対し、「役所」「会社」等の会社関係の用語は種類も少なく、頻度も低い。漱石は、実業家として社会的に活躍している人間ではなく、人間の内面的な部分のみみつめている学生や知識人を描いており、その小説の中の空間も、そういった傾向が表れている。

漱石は、登場人物の家や物語に登場する建物の位置関係、地理関係を比較的明確にしているため、「神田」「新橋」等、東京の地名が多く出現している。国内の地名だけではなく、「ヴェニス」「倫敦」等の外国の地名もみられ、これらに対する記述も比較的みられる。英文学を専門とし、海外留学の経験もある漱石の国際的な知識が表れているといえる。

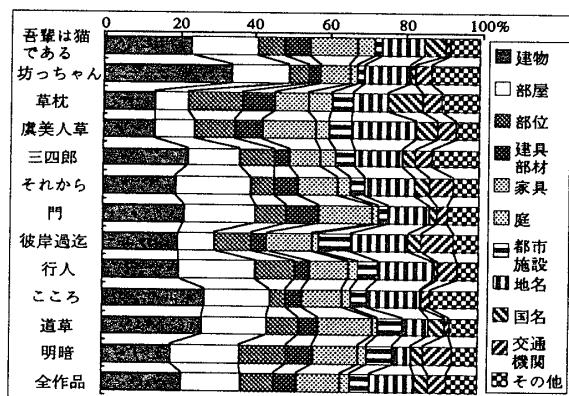


図-1 建築用語の分類別構成比

表-1 頻度の高い建築用語

建物	回数	機関	回数	部屋	回数	部位	回数	建具・部材	回数	家具	回数	庭	回数	都市施設	回数	地名	回数	国名	回数	交通機関	回数	その他	回数
家	709	89	室	404	門	232	障子	189	机	216	庭	191	往来	93	東京	385	日本	133	電車	229	二階	136	
宅	377	98	座敷	316	窓	146	戸	112	床	108	池	68	路	84	京都	146	西洋	106	汽車	155	町	113	
学校	317	192	玄関	241	入口	96	襖	101	椅子	106	垣	58	停車場	70	大阪	59	外国	49	車	145	国	111	
下宿	175	34	部屋	202	床(とこ)	62	豊	99	火鉢	97	垣根	20	通り	65	鎌倉	50	国	44	俵	53	田舎	95	
病院	111	20	書斎	202	壁	58	格子	65	鏡	94	生垣	15	道	54	新橋	35	朝鮮	29	船	51	奥	73	

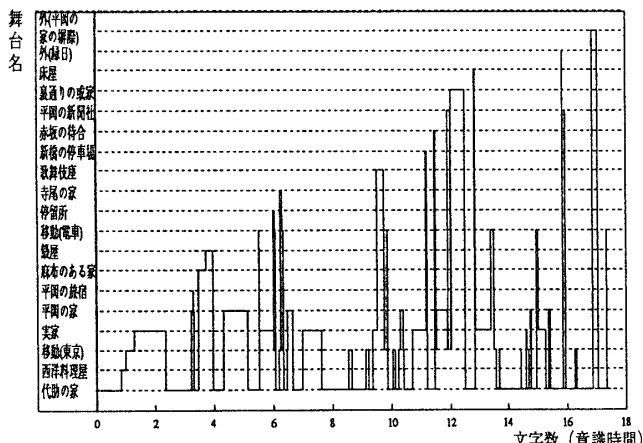


図-2 舞台推移図「それから」(単位:万)

家具は人々の生活に直接に結び付いており、一般庶民にとって当時盛んに導入された西洋文明との接点であった。漱石は家具の質、種類、状態について細かく描写し、これらの使い分けにより、登場人物の境遇、心理を暗示している。例えば、「火鉢」は夫婦間の心理状態や空間の様子を表す重要な要素であり、暖かい火鉢は家庭の暖かさや夫婦間の信頼関係を感じさせるが、冷えきった火鉢は孤独で淋しい空間を演出している。また、明るい「電燈」に対し「洋燈」は暗く遅れているもので、これらの使い分けからも漱石の空間における明確な差異が読み取れ、全体的に「洋卓」「蠟燭立」等の洋風の新しい家具のある所は、豊かで華やかな空間であるように描かれている。

「電話」の出現傾向についてみると、作品の執筆時期との関連関係がみられ、『門』以前の作品には「電話」は出現していないのに対し、『彼岸過迄』以降の作品には比較的高い頻度で出現し、「電話」が日常生活の連絡手段として急速に使われ始めていった時代背景が、建築用語の出現頻度からも伺える。

【舞台の推移と意識時間】 漱石作品は全体的に舞台推移が著しく、主人公の行動、特に空間移動が恋愛等に悩み苦しむ不安定な心理状態と深く結び付いている。図-2に『それから』における舞台推移図を例示する。意識時間からみた漱石作品における空間意識を探るため、舞台空間を[室内][室外][回想]に大きく分け、[室内]を[自宅][他の家]、[室外]を[移動][停止]、[回想]を[内部(空間)][外部]に分けて、意識時間を合計し、構成比を示したものが図-3である。全体的に内部空間における時間が多く、また『彼岸過迄』『ころ』等後期作品では[回想]が多くなっており、内向的な空間構成の作

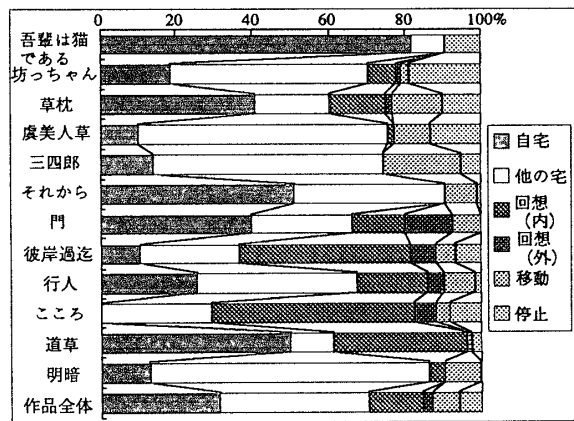


図-3 舞台分類別構成比

品がほとんどである。舞台推移と舞台の分類別の構成比を合わせて考察した結果、12作品は大きく5タイプに分類された。

A) 物語の大半が自宅のみで進行する作品

—『吾輩は猫である』

B) 自宅と他の家における行き来を中心に進行する作品

—『それから』『明暗』

C) 自宅よりも様々な他の家を訪れている作品

—『坊っちゃん』『虞美人草』『三四郎』

D) 自宅を軸にしながらも、回想や空想に耽る作品

—『草枕』『門』『道草』

E) 回想や手紙の部分が長く、この中で物語が進行する作品—『彼岸過迄』『行人』『ころ』

これらの分類と作品内容から考察すると、舞台推移と意識時間からみた空間構成は主人公の立場、境遇と密接に結び付いており、漱石自叙伝といわれる『道草』の空間構成は、漱石自身の日常生活における空間意識を示していると考えられる。

【結】 作品中に現れる舞台空間は主人公の立場、境遇、心理と密接に結び付いており、人間不信、厭世感に苦しむ主人公を主題としていることが多い漱石作品では、舞台推移と意識時間から考察した物語の空間構成も、全体的に内向的な傾向がみられる。これらの知的な人々は空間を細かく観察しており、多種多様な建築用語が出現している。家具の質や様子は住人の境遇・心理を的確に表し、建築用語の出現頻度と傾向は、変化しつつある明治・大正の時代背景を表している。

夏目漱石は、広い知識と繊細で豊かな感性により、登場人物の揺れ動く心理描写と共に、空間描写を行っているのである。

*1名古屋工業大学大学院博士前期課程 *2 同大学教授・博士 *3 鹿島・修士